研究ノート

ゲーテと占星術、想像力とポエジー

山川淳生　首都大学東京非常勤講師

Ⅰ　ゲーテとクリスティアーネのホロスコープ

ゲーテの代表作『ファウスト』の物語のすべてのはじまりの一番最初の節、Prolog im Himmel「神界でのプロローグ」の箇所で、ラファエル、ガブリエル、ミカエルの３人の天使が集まり、まずラファエルが以下のように物語の始まりの詩を歌う。

太陽は古来からずっと同じように
同胞の星たちと歌を競い響き合う
そして彼らの定まった軌道の旅は
稲妻の閃きによって完成し終わる
そのさまは天使たちに力を与える
その力が何なのか把握できずとも
言葉にできない至高なるこの業は
始まりの日と変わらず立派なまま[1)]

ここでは、星の軌道の動きを世界の動きそれ自体とみなし、稲妻の象徴がひとつの区切りの時節を告げている。かつて、天は神々の住むの領域とされていた。現在でも、金星ならヴィーナス（ウェヌス）、火星ならマルス、木星ならジュピター（ユピテル）など、太陽系の惑星にローマの神々の名が冠されている。つまり、天に住む星々は神々それ自身でもあったのだ。

そして、人間は生まれた瞬間の、その星々の位置関係によって、その者の性格や運命が決定づけられるとされていた。星々の位置関係はつまり、前述のような神々がどこに位置していて、そこからどのようなタイプの祝福を得ているかであり、その混ざり合いが人生を形成していくということだった。

同じくゲーテ本人による自伝『詩と真実』*Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit* でも話は自身の誕生時の星の座相についてから始まる。

1749年の8月28日、正午12時の鐘とともに私はフランクフルト・アム・マインでこの世に生を受けた。星の座相は良いものであった。太陽は乙女座に位置し、カルミネート[2]していた。木星と金星はそれに対して優しげなまなざしを向けていて、また水星にも対立していなかった。土星と火星は無関心な態度をとっていた。ただちょうど満月の頃合だった月だけが、その対立的な輝きを、月の支配する時間帯になればなるほどますます強くしていった。月は私が生まれてくることに反対していて、そのせいで私が生を受けるまでに時間がかかった。

これらの良いアスペクト[3]は、後に占星術師たちがなるほどこれは良いものだと言ってくれたようなものであるが、私は確かにその恩恵を受けていた。というのも、助産婦の不手際もあって死生児として生まれたが、しかしさまざまな人々の尽力によって、私はこの世の光をこの目に見ることができたからである[4]。

ここでゲーテ本人の手によって、現代でも使われている占星術用語でもって、丁寧に自らの生年月日から出生時間までが書かれている。それゆえ彼のホロスコープを入手したり作成するのは現在では非常に容易で、いまや細かい度数などもより詳細に見ることができる。

本人の記述にもあるように、ゲーテの太陽は乙女座でありホロスコープの最上部にあたるMHにぴったり座している。そのようにカルミネートした星はホロスコープのなかでも特別強い力を発揮するとされる。

太陽が上方にあるということは、ゲーテの人生の方向性も表している。ゲーテは作家として当時成功しながら同時にヴァイマル国の宰相でもあった。それゆえ当時のドイツの地位の高い人物たちとの交流も多く、ナポレオンとも対面している。それはまさに太陽がMH付近にある人の人生といったところだ。

自伝の記述にはないが、ゲーテのホロスコープにおいて山羊座にある火

星もまた、同じ土のエレメントをもつ乙女座の太陽にトラインという良い関係を投げかけており、本人自ら意識しなくても自然と強い行動力とやる気を、しかし無鉄砲にではなく地道に着実に発揮出来る人であっただろう。

そのようなホロスコープの天辺（MH）にある太陽に対して、むしろホロスコープの最も下（IC 地点）にある月との位置関係が、自伝にも月だけが対立していた、とあるように、太陽と月がお互い反発し合うオポジッション（180 度）という悪い位置関係を持っている。

太陽はまさに天が定めたような本人の人生を支配する第一の方向性であり、周囲の環境がその人物に求めてくることでもある。それに対して、月は隠れた本当の自分の欲求のような意味がある。例えば、太陽と月が同じ位置にあるか近い人は、人生の方向性や周囲から期待される自分と本当の自分が一致しており、矛盾してたり正反対であったりするよりも生きやすいと言われる。ただし、客観的にものごとを見定める視野が狭くなるとも言われている。

ゲーテの場合、太陽と月がうまく調和しないということで、仕事も表す天頂の乙女座太陽、すなわち特に秩序だった緻密さや完璧さを求められる仕事と、それと正反対のしかも地の底にある魚座の月という、瞬間的かつ直感的で非理性的な世界への強い親しみを持っている本当の自分の姿との間に矛盾があったであろう。

太陽と月は、スクエア（90 度）ではなくオポジッション（180 度）であるため、その矛盾は、内的に悩み誰にも言えない葛藤というより人にわかる反発として現れるところだろうか。

ゲーテ本人は自伝で、水星、金星、火星、土星に関しては特に悪いことはないと言っているが、実際にホロスコープを出してみれば、喜び、愛、女性、楽しみなどを司る金星に良くも悪くもいろいろな相位が見受けられる。

現在、ドイツ文学のゲーテ研究とされるものは、ゲーテの恋愛遍歴に関する話が比較的多数を占めている。それはゲーテ本人の恋愛経験を彼が自

ら著作で告白していることと、なおかつゲーテの文学はそういった経験を登場人物に投影させて書かれた物語が多数見受けられるためである。ゲーテの出世作『若きウェルテルの悩み』から晩年の『西東詩集』『マリーエンバートの悲歌』まで、自身の一方通行的で強すぎる衝動に起因する「うまくいかない恋愛」をゲーテは次々に引き寄せ、そしてその遍歴を物語や詩にして書いている。

ゲーテの金星に対して、衝動や行動を意味する火星が比較的弱いスクエアをなし、また拡大を意味する木星はオポジッションを誤差なしで強く生じさせている。金星と火星のスクエアは「恋い焦がれる心」の過剰を意味するだろうし、金星と木星のオポジッションは、ふつうの占星術の本などの解説では、凶座相の割に悪くはかかれないことも多いかもしれない組み合わせだが、しかし魚座の木星は理想化されすぎた妄想的な愛を増長させていることだろう。

このふたつの座相が、過剰な恋心と、相手を妄想的に理想化する恋愛傾向をつくりだし、それが増幅し、ゲーテはそれに悩み続けたことだろう。そしてその悩みの集大成が、『ウェルテル』などの、ゲーテをゲーテたらしめる著作なのかもしれない。

同じく、金星はファンタジー、妄想、不安定、中毒といた意味を持つ海王星ともセクスタイル（60 度）の間柄を持っている。こちらはむしろ良い位置関係である。ゲーテは一方でそんな状況をもしかしたら心のどこかで楽しんでいたのだろうか。確かに、それを文章にすることで、ひとつの成功を得ている。ただし、ゲーテが生まれた頃には、土星以降の太陽系の惑星、つまり天王星、海王星、冥王星（少し前に太陽系から除外されてしまったが）はまだ発見されていない。天王星の発見は 1781 年 3 月、ゲーテが 31 歳の頃のことであり、海王星、冥王星はゲーテの死後のことである。まだ発見されていない星の影響を何と言うかは人次第である。

ゲーテのホロスコープに関しては、心理学者カール・グスタフ・ユングも言及している。ユングは無意識というものの性質についてさまざまに言

及しているが、そのなかのひとつに共時性、シンクロニシティという概念がある。

シンクロする、という言葉は日本語でも使われる。ふたつの異なった事象が特徴的に同時発生することである。ユングのシンクロニシティは例えば、３、４桁の特定の数字の列を短時間やある１日のなかで何度も見たりすることや、何十年も連絡がなかった友人のことをある日突然何の前触れもなく思い出したときになぜか突然その友人から連絡が来る、といった確率論的に起こりづらいとされるような事柄が、なぜか起きることを指す。

そしてその際、そのようなことが起こったということ自体に何か意味があるのだろうかという疑問が浮かぶ。そのような稀有なことが起こったとき、人はそれが特別な何かなのではないか、と感じることになる。もしもこの世が、偶然の事象たちが特に理由もなく無造作に撒かれたような世界だとしたら、なぜそんなことが起きるのだろうか。ショーペンハウアーからも影響を受けているユングの考えは、そこから人間の無意識の意思が世界の現象に作用を持たらす、といった展開に続く。

そのような、この世の「偶然」の平均性では説明できない事象が起こりうる、という世界の性質に関してユングが扱ったもののうちひとつがこの論文「非因果的な関係性の原理としての共時性」*Synchronizität als ein Prinzip akausaler Zusammenhänge* である。

この論文のなかで、ユングは結婚している多数の男女のホロスコープを作成し、それらの男女間の太陽と月、および金星と火星の間に、0 度のコンジャンクション、180 度のオポジッションといった重要なアスペクトが見受けられるかどうかの調査と統計を行っている。それぞれ占星術において、お互いの太陽と月のアスペクトは結婚を、金星と火星のアスペクトは恋愛を象徴する。

そしてその結果として結婚している男女にそれらのアスペクトが、確率的な平均よりも多く見られることを指摘している。

ユングはその文脈中の注釈で、ゲーテとその夫人クリスティアーネ・ウルピウス（Christiane Vulpius, Christiane von Goethe）の間の太陽と月の関係

にも言及している。そこでは、ゲーテの太陽の乙女座5度とクリスティアーネの月が乙女座7度で一致することが述べられている[5]。

ただ、実際にこのふたりの誕生日のデータを入力してホロスコープを作成してみると、クリスティアーネの誕生日である1765年6月1日[6]の20時30分[7]に月は蠍座14度にあるため、乙女座7度ではない。出生時間に保証はないが、多くのゲーテに関する文献でもクリスティアーネの誕生日はそのように書かれている。

もっとも動きの早い天体である月は1日で星座を13度ほど進む。それに対して乙女座7度から蠍座のはじまりまでは少なくとも天秤座分を30度含めた53度以上の移動が必要であるため、クリスティアーネが何時生まれだとしても、この日の月が乙女座になるのは不可能である。

ただ、仮にデータを信用し20時30分だとして、蠍座は乙女座から60度であるため、ゲーテの太陽乙女座5度に対するクリスティアーネの月蠍座14度の相性は、9度の誤差を持ったセクスタイルという占星術的に良いとされる度数になる[8]。

仮にもし乙女座5度と蠍座5度であれば0度のセクスタイルという普通に良い度数であり、（もしもクリスティアーネがその日の午前6時半頃に生まれていたらそのくらいの度数だろう）ユングの統計で結婚のサインとして用いられていたコンジャンクションとオポジッションとはまた違うアスペクトとはいえ、それらと同じくらいの影響力を持つメジャーアスペクトとして、占星術的には結婚のサインとして認めるには十分である。

むしろこの相性図においては、ゲーテの太陽からクリスティアーネの月ではなく、クリスティアーネの太陽からゲーテの月のほうが、結婚のサインとしては特徴的である。なぜなら、ゲーテの月が魚座の11度であり、クリスティアーネの太陽が双子座の11度にある。誤差なく90度の角度をなし、吉兆ではないがしかし互いに惹かれ合う特別なサインとなる。この角度も結婚したカップルによくみられると言われる角度である。

またクリスティアーネのノースノード、すなわち今世の使命、生まれてきた目的、などをあらわす象徴が魚座の 12 度にあり、前述のゲーテの月と 11 度で一致している。（小数点まで入れれば、それぞれ 12.07 度と 11.52 度であり、その誤差は少数点以下の 0.15 度分である。）1806 年にナポレオンの軍隊がヴァイマルに侵攻した際、ゲーテの家に侵入してきたフランス兵によってゲーテは命の危機にさらされたが、クリスティアーネらが身を挺して守ってくれたお陰で一命をとりとめたという。ある種このふたりの宿命的なサインを見ているような逸話ではある。（とはいえ、ノースノードは月のように早くないので、クリスティアーネの誕生日前後 1 週間くらいに生まれた人は皆同じような度数を持つことになる。）

こういった象徴を、ゲーテやクリスティアーネのホロスコープは示している。

II　想像力と迷信、ポエジーの言葉たち

ここで、前述のシンクロニシティ的なものの関連として、ゲーテは『西東詩集』のなかで、「本占い」的な章を書いている。本占いというものは、ペルシアなどの伝統で、何か天に聞きたいことを頭に浮かべるなどしたのち本を無造作に開いて、開いたページの目に付いた文章がその聞きたいことに対する助言になるという占いの方法である。現代のカード占いや、より気軽な意味でのおみくじに原理は近い。

『西東詩集』はペルシアの神秘主義的詩人ハーフィズの影響を受けて書かれた詩集であり、当時のドイツ人が考えた理想郷的なペルシア風の趣というもので詩集自体は一貫している。その詩人ハーフィズの詩句は、その抽象的な物言いで何と言っているかを様々に解釈が可能な性質から、本占いによく使われた。

それにならい、ゲーテも Buch der Sprüche「箴言の書」においてそのような本占いの要素を付け加えた。『西東詩集』に付与されたゲーテ本人による Noten und Abhandlungen「注記と論考」のなかでも、Buchorakel「本占い」

の項目にそのことが解説されている[9]。

こういったものは、前述のカード占いやおみくじなども含め、無造作に引いた象徴が、未来のヒントや今最も必要な運命的要素を宿しているという考え方による。ある意味では、占いの結果を解釈する者が、問題と占いの結果の共通点を探し、何らかの答えを出す。

ユングがシンクロニシティという概念について考えるきっかけは、占星術などもそうであるが、中国の易経のドイツ語訳を読んだことなどにもよる。易経は、古代中国からの伝統的な占術のひとつの集大成であり、その筮竹を使ったくじ引き的な占いの行為から、人間の無意識がこの世の事象に与える影響をユングは考えることとなった。

こういった、多数ある中から無造作に引いた何か、を解釈する占いの方法は、世界各地に見られ、特に古代から続く文化に根ざしているものである。古代ローマの歴史家タキトゥスがゲルマン領域に遠征した際の報告記である『ゲルマーニア』でも、それが書かれた紀元後1世紀頃のゲルマン人たちの占いの習慣が描写されている。民族の未来のことや、戦の勝敗などを占うときには、鳥や馬の様子から前兆を占う方法のほか、家長（pater familiae）が神々に祈った後くじを引いて解釈する[10]。

古代の共同体では、その共同体がこれからどうすべきか、という判断が当然ながらたいへん重要なことがらであった。その判断によって、その共同体は繁栄したり衰退し滅亡したりする。

それゆえ、その共同体で最も偉い導き手とは、未来にどうすべきかを最も正確に判断できる者、すなわち未来を予測する占いの技法に長じ、同時にその運命の行方を握る神々を正しく祀ることができるシャーマンが最も権力を持つリーダー的な存在であった。『ゲルマーニア』でもそのようなシャーマニズムの世界観が見受けられる。

このように、カードやくじの集まりのなかから偶然ひいた何かや、動物たちの動きや自然の様子、といった現象に、人間たちの運命の行方を支配する神々の意思が表れており、それを読み解く技術に通じる者は未来を読

み解く事にも精通することになる。神々が人間に示す言葉は、人間同士の言葉ではなく、自然のなかにあらわれる象徴として、直感でのみ理解できるものとして現れるのである。

プラトンの『饗宴』でも、その世界観が表されている。そこでは、以下のように説明される。

神は人間に直接交わるようなことはなく、ダイモーンと呼ばれる存在たちを通して人間にものごとを伝える。そのダイモーンたちは、占術（μαντική）、犠牲を捧げること（θυσία）、秘儀の儀礼（τελετή）、歌で呪文を唱えること（ἐπῳδή）、魔術の儀式（γοητεία）、などを通して表れ、それらによって神の意志が人間の前にあらわされるという[11]。

ここまで見てきたような営みにおいて人間は、言葉では表せないものを言葉以外で理解しようとする直感的領域をはたらかせている。ゲーテもまたそういった感性について述べている。*Maximen und Reflexionen*『箴言と省察』のなかのいくつかの断片より、

> 神秘主義（Mystizismus）は心のスコラ主義だ、感じたことを方言であらわしたもの（Dialektik des Gefühls）だ[12]。

> ポエジーは自然の秘密を解釈することであり、形象（Bild）によって理解しようとする。
> 哲学は理性の秘密を解釈することであり、言葉によって理解しようとする。
> 神秘（Mystik）は自然と理性の秘密を解釈することであり、言葉と形象によって理解しようとする[13]。

> 神秘主義＝まだ熟していない状態のポエジー・哲学
> ポエジー＝熟した自然
> 哲学＝まだ熟していない状態の理性[14]。

迷信（Aberglaube）は人生のポエジーだ。だからこそ、詩人にとって迷信的であることは悪いことではない[15]。

ポエジーという言葉は、詩それ自体や詩作することなどを意味する。ドイツ語の詩人は Dichter であり、詩は Dichtung である。dicht ：密着する、すきまのない、といった意味からきているが、ここでは Poesie という語がつかわれている。Poesie と同じく、英語の poet や poem などの単語はギリシア語で詩：ποίημα, ποίησις 等や詩人：ποιητής、それらの語源の動詞 ποιέω は「創造する」という意味を持つ語からきている。ギリシア語の七十人訳聖書の一番最初、創世記の 1:1 で「はじめに、神が天と地を創った」の「創った」も前述の動詞 ποιέωである。

ここでは、ポエジーの方法が自然をそのまま理解しようとすることであるとされている。理論的で説明的、なおかつ他者にわかりやすい明晰な言葉では言い表せない領域の感性に自然の本質を見ている。

そしてそのようなポエジーの方法論には「迷信」のようなものも決して悪いものではないとも述べている。ゲーテの時代はいわゆる啓蒙主義の全盛期であり、それまでの迷妄を全て払拭する強い理性の光に価値が置かれる時代の真っ只中であり、その思想傾向の影響は現代まで続いている。

ゲーテ自身も、宗教の重箱の隅の規律や聖句の言い回しの差で争い合っている宗教派閥などに関して形式よりも信仰自体の大切さを主張しているような詩[16]を書いており、前時代の「正統な宗教派閥とそれ以外の悪魔的な間違った宗教派閥」のような構造に対しては啓蒙的で、それよりも信仰という本質だけを重んじる態度を示している。

迷信に関しても、*Zur Farbenlehre*『色彩論』でロジャー・ベーコンについて扱った章など[17]においても述べており、それらでは「信仰」の対極は「不信仰」であり「迷信」ではないということを述べ、そしてその迷信を人間の本質のひとつであると同時にそれを生み出す想像力自体に価値を置いている。

ゲーテにおいては、「迷信」とされるものの世界観もまた、世界と自然

を理解しようとする、人間にとって重要な普遍的営みなのである。それは自然を観察し、経験的に理解するが、その際には感情や感受性、そしてそれらを理解するためのより直感的、無意識的な想像力を通して行われる。啓蒙主義の理性的な鋭い光とはまた異質な世界であるが、ゲーテはそういった迷信の価値を認めていた。

そして同時に迷信のなかに現れているものこそ、自然のあり方を、なるべくその本質を壊さずにそのまま理解しようとするポエジーの営みなのである。

神秘主義も主に詩的で抽象的、象徴的な言葉で、明晰な理性よりも感性的に世界を理解しようとする。確かに、そのやり方でしか見えてこないものもある。ここで特にゲーテの Dialektik des Gefühls ：感覚の方言性、という言葉によって、その本質が突かれている。自然の本質を突く言葉は、方言的、すなわちそれは普通のコミュニケーションとなるには節々に違和感があって、相手の感性や感受性によって様々になる、誰にでもはっきりと伝わるとは限らない言葉となるのである。しかし同時に、そのような言葉でしか自然の本質は突けない。その自然とリンクする感情の本質も突けない。そのような意味がこのひとことで表されている。

神秘主義は基本的に、閉鎖的な「秘儀」の形態を持っていた。選ばれた者のみが参加できる限られた共同体であった。神秘主義が自然についてあらわした言葉が世に無造作に広まっても、人によってポエジーや感受性を無視してそのまま受け取ってしまったり、誤解されて広まるだけであるため、秘儀の言葉をそのポエジーや感受性によって伝えることができると認められた者にのみ、秘儀の内容は伝えられた。自然と自身の感情を、最もふさわしく、最も本質を損なわずに言い表すには、その Dialektik des Gefühls が必ずついてくるということである。

私たちの感情や感受性を、明晰で理論的、誰とでも共有できるような言葉ですべて表現しようとしても、うまく伝えきることができないと感じることも多々あるだろう。それがやはり、理性的な言葉の限界なのだろうか。

だからこそ、自然を、そして人間の感情の最も重要な部分を理解しようとする際、ポエジーの方法が重要になってくる。そのようにゲーテは考え、詩を書くということの役割を感じていたことだろう。ゲーテ自身も多く経験した、理性的な言葉の表明では納得できないたくさんの出来事や、それを通して湧き上がる感情は、そういったポエジーの抽象的な言葉でしか表現不可能だったのだ。人間の感情や感受性の、最も個人的な、その最も繊細な箇所はおそらくその領域に属するものなのだ。

ヴァイマル国の宰相でもあり、作家として小説を書くことを期待されていた自らを、ゲーテはよく詩人といつも自称し表現したがっていたが、やはりこのポエジーにのみ達成される事柄に本質を感じていたためなのだろう。

注

1) HA Bd.3 S.16
2) 占星術の用語で、ホロスコープの一番上、MH ：ミッドヘヴンに最も近い度数に位置すること。
3) 星の位置同士の関係性のこと。ホロスコープの 360 度（12 星座× 30 度）の上で、例えばある星が他の星の 60 度先に位置しているとその星同士の関係は良好であり、90 度先に位置していると、その星同士の力がぶつかりあって悪い、といったように算出する。その度数の基準は、各星座の持つ火水風土の四大元素による相性などにも基本的に根ざしている。
4) HA Bd.9 S.10
5) *Synchronizität, Akausalität und Okkultismus*, Carl Gustav Jung, München : Deutscher Taschenbuch Verlag, 2001, S.43 邦訳：カール・グスタフ・ユング、ヴォルフガンク・パウリ『自然現象と心の構造』訳：河合隼雄、村上陽一郎、海鳴社、1976、53 頁
6) *Goethes Yearbook vol.8*, Columbia - South Carolina : Camden House, 1996, p.306
7) 出生時間に関しては、http://www.astrotheme.com/astrology/Christiane_von_Goethe（2016/11/16 閲覧）なども参照。
8) この誤差（オーブ）を何度まで拾うかというのによってもホロスコープは変わる。あまりにも誤差を広く取り過ぎれば、象徴だらけの何でもありの数撃ちゃ当たるみたいなホロスコープになってしまうため、限定する必

要がある。5 度以上の誤差はそれほど強い意味を持たない薄いものくらいに考えてもいいだろう。同時にアスペクトによって誤差を何度まで取るべきかもまた様々である。

9) HA Bd.2 S.189f.

10) タキトゥス『ゲルマーニア』訳注：田中秀央、國原吉之助、大学書林、1963、27-29 頁

11) Plat. Sym. 202e-203a, 及び、プラトン『饗宴』訳：久保勉、岩波書店、1952、107-108 頁

12) BA Bd.18 S.527

13) Ebd. S.625

14) Ebd. S.625

15) HA Bd.8 S.293

16) Vgl. BA Bd.1 S.425, 詩集 *Gott*, *Gemüt und Welt*『神と心情と世界』の詩より

17) Vgl. GA Bd.16 S.359ff.　及び『色彩論 完訳版』第 2 巻（歴史篇）、訳：高橋義人、前田富士男、南大路振一、嶋田洋一郎、中島芳郎、工作舎、1999、135-140 頁、638-640 頁、696-697 頁